

第 39 号
 月 1 回 発 行
 ひの心を継ぐ会
 〒799-1336
 住所:愛媛県西条市
 上市甲 720-1
 TEL:080-2986-0856

綱 領

- 一 私達は明德を明らかにします
- 一 私達は国家の鎮護となります
- 一 私達は大和世界を建設します

神道(十三)(大和世界の建設)

古事記

宇宙の創始

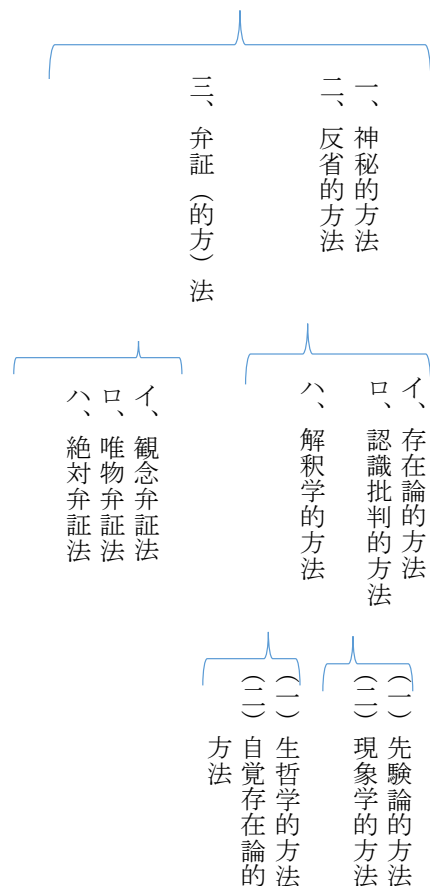
— 実在 — (二)

反省の学

竹葉 秀雄

自覚するのである。その故に、哲学せんとするものは、哲学の歴史に於て現れた哲学の方法を型として相互に比較し、其間に論理的関係を明にすることに由り、哲学の方法を体系的に自覚することが至当であるとして、次の如き方法を表示する田辺元氏の説を妥当と思う。

哲学的方法



一般に認識論上の用語として第一次の客観の優先を最後まで全面的に固執する立場を「実在論」と言い、第二次の主観の優先を認める立場を「観念論」と言うているのであるが、哲学上からすれば、「実在論」は哲学の否定(神を客観的絶対的にみるキリスト教など)であり、哲学は必然的に「観念論」である。併し、また、「実在論」を排斥してしまう「観念論」も前述した如く、その抽象性により却て自己を否定し、哲学を不可能にする。ここに於て第三次の反省、即ち主観客観の統一の立場が要求せられる。これに於ては単なる主観も単なる客観も否定され、超越的全体が実現される。それは「実在観念論」ともいうべきものである。主観と客観との対立を絶対否定的に統一するものであるから「絶対反省」と言ってもよからう。これが哲学上の「絶対自覚」と言われるものである。ヘーゲルはこれを「絶対知」と称した。

フイヒテやヘーゲルが言えるが如く哲学は「哲学には他の学に於けるが如き意味に於ての始めは無い。それは一つの円環を形造る」もので、哲学は、哲学の方法に関する論議は哲学的思索に先だつてその思索の方法を学ぼうとするのではなく、一つのもの、他のもの予備的序論をなす如きものでなく、思索に於て思索の方法を

第四章 士道論

第三節 志の統格

菅原 兵治

志の統格

斯くて吾々は独自自尊の「命」を知り、「志」を立て、「道」を行く。而もこれは決して概念的知識の問題に止るものではない。苟くも其事が吾々生命の直接的な生活事実面に直面してそれが直ちに我が身の吉凶禍福に関わる時、知は直ちに現れねば止まぬ。故に我自身の生活事実として以上三者の関係を真に知り得たとすれば、それは直ちに勇敢なる行として「命」の彼岸より「志」の彼岸に到らんとする精進の努力となる。従って吾々の生活は、常住「志」によって統格せられて来る。諸々の欲求群を精察して常に「志」の「一」に統制する。是れ取りも直さず、「惟れ精、惟れ一、允に厥の中を執る」の大正至中の生活である。斯くて志は決して冷い概念の塑像ではない。これ無ければ我が生活の一切が弛緩し、崩壊して、三界無安の火宅裏に焦苦せねばならぬまでに、我と離し得ざる熱願の対象である。欣求の彼岸である。天の一方に望む思慕の佳人である。実にこれ無ければ一刻も光と力とに満ちた生き甲斐のある生活をばなし得ない生命の指南車である。熱血国士藤田東湖が獄中にもせる正気歌に、「荏苒二周星、唯斯の気の随うあり。嗟、予万死すと雖も、豈汝と離るるに忍びんや」と歌って、「天地正気」に対して恋々然ゆるが如き熱情を述べているではないか。嗟、予万死すと雖も、汝と離るるに忍びんや。—これこそ大丈夫の「志」に対する欣求精進の発憤である。

海行かばみずくかばね山行かば草むすかばね

大君の辺にこそ死なめかえりみはせじ

「大君の辺にこそ死なめ」—これ日本男子のひとしく抱く至高の国民的「志」念である。朝に道を聞かば夕に死すとも可なり。和氣清磨も、菊池武時も楠正成も、乃木希典も、皆この「志」の為に一切を捧げ尽したのである。

義、憤、勇

此の「志」に対して精進する純乎たる生命力が、知的表現をなす時、それは「志」に対して諸々の欲求群の是非（義か不義か）を明弁する義となり、情的表現をなす

時、それは孔子の所謂「憤を發して食を忘るる」底の憤となり、情的表現をなす時、それは「自ら反みて縮くんば千万人と雖も吾往かん」という勇となる。真の義憤、義勇は、かくて正大なる「志」によって始めて生じ来るものである。

古代の心

三浦 夏南

最近聞いた話だが、精神的な不安、焦燥を解決するのに最も手近で簡単なことと言えば、走ることであるという。走る以外にも泳いだり、自転車に乗ったりでも良いが、一定時間息が上がるような強めの有酸素運動が良いという。これは自分の経験的にも感ずることだが、強い運動をすると、体にスイッチが入ったように動き易く、精神的にも安定するものである。これはなぜだろうと疑問に感じていたが、先日面白い解釈を耳にした。それは、人間の体には狩猟時代の人々の DNA が深く刻まれていて、獲物を追うという行動をすることで、安心感が得られるようになっていくという。逆に走っていないと、今日の食べ物を取ることができないかもしれないという不安や焦燥が現れてくる。これは遺伝子レベルで人間に組み込まれているものであり、時代が移り変わり、狩猟をすることが生きて行く上で必須の行動でなくなっても、そのメカニズムは消えることがないのである。つまり、一日の初めに運動をしないということは、今日食べていけないかもしれないという、本能的な不安を無意識のうちに自らに与えていることになるのである。我々が持つ様々な悩みは現代的なものであったとしても、不安の種、悩みの根は、古代的な食べられないかもしれないという根源的なものから発生しているかもしれないのである。最近サウナが流行っているのも、高温のサウナに入り、その後水風呂に入るといって危機的な状況を敢えて作り出すことによって、そこから抜け出せた時に与えられる安心感を得るためである。危機的な状況から抜けたということ、食べていけないという古代的な思考が自動的に発動するのである。

似た話で、朝ごはんを食べることは一日のリズムを悪くしてしまうという考え方もある。人間というのは本来、何か仕事をした上で、その報酬であるところの食べ物を得ることが出来るという考えが、遺伝子レベルで組み込まれている。そのた

めご飯を食べると仕事が終わったと体は認識するのである。つまり、朝にご飯を食べてしまうと、これから仕事を始めなければならぬにもかかわらず、体は休息状態に向かうのである。これも現代的な生活習慣と、古代的生活習慣のズレから起る問題である。

我々は狩猟社会を超え、農耕社会を経て、工業社会へと進展して来ているように思っているが、我々の肉体は常に狩猟時代、農耕時代の本能を残しているのである。しかもその本能は本質的、根源的であり、我々のあらゆる感情の基本となっているものである。先述したように、今日食べられないかもしれない。生きられないかもしれないという不安や焦りは、あらゆる不安の根底にあるものである。もしこの不安があり続けるならば、そこからあらゆる不安が派生的に表れるであろう。しかし、その不安の種はというと、走っていないという原始的なものなのである。我々は時代は変わった、文明は進歩したと豪語するかもしれないが、我々自身はそれほど古代から変わっていない。変わっていないのであれば、古代から行われてきたことを現在にも大切にしていかなければ、苦しむのは我々自身である。

とよくも農園だより

梅雨入りが早かったものの、なかなか梅雨明けを迎えず、また月末から雨の多い一週間となりそうです。

今月よりネギの出荷作業をほとんどアルバイトさんにお任せして、私たちは圃場管理に集中する形態をとっています。最初は、知り合いに急遽お手伝いをお願いする形で始まったお仕事でしたが、知り合いが知り合いを呼び、今は五人の方に協力頂き、一日に二人は入れるようにシフトを組んで、ほとんど毎日入って頂いています。農業をされている方から子育て中のお母さん、就活中の方など、みなさん元気な方々ばかりです。倉庫でネギの皮をむきながらいつも和気藹藹とした雰囲気です。楽しそうな会話が聞こえてきて、私たちも元気を貰っています。

アスパラガスは今月から収穫時期のピークを迎えています。朝夕の収穫が本格的に始まり、毎日正産品だけで十五キロ前後のアスパラガスが収穫出来ています。定期的な防除を行い、害虫被害や病気を出すこともほとんどなく葉が青々と茂った元気なアスパラガスが育っています。

アスパラガスの朝夕収穫が始まってから仕事の忙しさが増し、息をつく間もない毎日を送っています。暑くてへこたれそうになる時もありますが、いつも前向きに仕事に取り組む主人の背中を見ると、「あともう少し」と元気が湧いてきます。来年には私も三十歳を迎えます。就農した三年前を振り返ると時が経つ早さを思い知らされます。毎日主人と汗水流しながら頑張った日々がいつか「あの時が懐かしい」と一緒に思い返す時、時が来るのだからと思いつつ、

毎日一生懸命農業に勤しんでいます。

梅雨明けが待ち遠しくなりますが、雨の時は心身共に休息を十分にとれるチャンスでもあります。暇ができればヨガをしたり読書をしたり、息子たちと遊んだりして、身体を労わりながら梅雨の時期を満喫したいと思っています。



三浦 杏奈

★今後の予定

先月に引き続き個別での勉強会の対応をさせて頂いています。ご希望の方は事務局までお電話ください。

★一燈照偶 万燈照国

ひの心を継ぐ会は竹葉秀雄・近藤美佐子両先生の精神を継承し、発展させることを目的として生まれた会です。一人の「ひ」の精神が周囲の人々の心に「ひ」を燈し、やがてそれが国を照らす「ひ」になることを願い、活動を行っております。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

★年会費

一般会員	三千元
賛助会員	一万円
特別賛助会員	三万円
支援会員	一万円

★振込先

「ひの心を継ぐ会」

愛媛銀行・本町支店・普通預金

口座番号 6142735

★謝辞

日頃より当会をご支援いただき、誠にありがとうございます。本年につきましては、新型コロナウイルスの流行により、当会の活動としての慰霊祭や勉強会の開催は叶いませんでしたが、月報という形で「ひ」の心の普及活動には取り組むことができました。ひとえに皆様のご支援のおかげでございます。重ねて御礼申し上げます。

当会の活動も七月より六年目を迎えます。今後ともご支援を賜れば幸甚です。総会資料に関しましては、会計の関係上、月報七月号にてお送りいたします。よろしく願いいたします。